

Title	アメリカ産業革命の歴史的特質：商業資本転化の歴史的意義をめぐって
Sub Title	The Boston associates and American industrial revolution
Author	中村, 勝己
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1958
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.51, No.5 (1958. 5) ,p.385(13)- 401(29)
JaLC DOI	10.14991/001.19580501-0013
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19580501-0013

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

つそれを廢田とし、亡処とするのである。かくて、関東の諸国は年と共に亡処が増加して行く。これは農民が過税及び高掛物材入用伝馬夫役等を逃れ、それをばふかんとするために止むをえずして取られた手段であるが、「其実は至極最取の事にて不便と云も余り有」というものである。このように「上方中国と表裏」して、田地を多く所持している百姓ほど貧窮して行く原因は「色取見取の定法」にあるため、「田地少く所持せん事を謀る風俗なれば、極貧に困窮し、間引子すると荒し作りは箱根より東諸国の国為なり」という結果となったのである。第二については「剩に船舶の海道及河道悪敷、国産の運送容易に仕難きに縁て貧国と可成道理明白也」と、関東諸国が衰微する根本の原因は、実に「東都へ渡海の海道に両所の大難所有故」である。これが利明をして長器論を書かした国内的事情でもあって、よく有無相通するための、運輸路及び運輸機関の改良発展に意を向けるに至った所以である。第三のものとして考えられることは、関東地方における利根川の存在である。「関東の国病は利根川に有、此川の水害は霞ヶ浦及鹿嶋入江の大湖に洪水溢して水害と成也」という。利根川が関東平野に交通の利便を与えるものであると共に、一度洪水至れば、関東の沃野は泥水と化してしまふのである。ここにも関東における貧困の一因を見出している。(未完)

(注一) 本多利明「経世秘策・卷下」(本多利明集二八頁)
 (注二) 本多利明「長器論」(本多利明集二一七—一八頁)

(注三) 本多利明「経世秘策・卷下」(本多利明集二二頁)
 (注四) 「同」(同 二二頁)
 (注五) 本多利明「自然治道之弁」(本多利明集二五二頁)
 (注六) 本多利明「経世秘策」(本多利明集二一一—二頁)
 (注七) 「同」(同 二二頁)
 (注八) 本多利明「西域物語」(本多利明集一八九頁)
 (注九) 本多利明「河道」(本多利明集二二五頁)
 (注一〇) 本多利明「西域物語」(本多利明集一八九頁)
 (注一一) 本多利明「河道」(本多利明集二二五頁)
 (注一二) 本多利明「西域物語」(本多利明集一八九頁)
 (注一三) 本多利明「河道」(本多利明集二二六頁)
 (注一四) 「同」(同 二二五頁)
 (注一五) 「同」(同 二二五頁)
 (注一六) 本多利明「西域物語」(本多利明集一八三頁)
 (注一七) 本多利明「経世秘策」(本多利明集二二頁)
 (注一八) 本多利明「河道」(本多利明集二二六頁)
 (注一九) 「同」(同 二二六頁)
 (注二〇) 本多利明「西域物語」(本多利明集一八九頁)
 (注二一) 本多利明「蝦夷道知辺」(本多利明集三三二頁)
 (注二二) 本多利明「西域物語」(本多利明集一八九頁)
 (注二三) 本多利明「河道」(本多利明集二二六頁)
 (注二四) 「同」(同 二二六頁)
 (注二五) 本多利明「蝦夷道知辺」(本多利明集三三二頁)
 (注二六) 本多利明「河道」(本多利明集二二六頁)
 (注二七) 「同」(同 二二七頁)
 (注二八) 「同」(同 二二七頁)

アメリカ産業革命の歴史的特質

——商業資本転化の歴史的意義をめぐって——

中村 勝己

目次

一、序論

二、フォール・リヴァー

三、チョコビー

四、ホリヨーク

五、結語

戦後に於ける我が国のアメリカ経済史研究は著しい進歩を遂げた。その研究の中心はいくつかあったが、特に研究が集中されたのは産業資本の形成過程であった。その論点は、一言にしていえば、アメリカ産業資本の形成は、ボストン等の大商業資本が「ボストン製造会社」を始めとする「ウォルサム型」綿業にその資本を再投資したコースに求むべきか、ニュー・イングランド農村の分解の中から出てきた農村工業の自生的展開に求むべきか、という点にあっ

アメリカ産業革命の歴史的特質

た。かの地の研究は素より、我が国に於ける諸研究も、ニュアンスは様々であるが、大体に於て前者を支持している様に思われる。併しその方法なり論点なりは様々であり、筆者には承服できぬものもないわけではない。

ここで問題を筆者なりに整理してみるとこういふ事になる。第一に、どの産業部門をとりあげるか。当然乍ら基幹産業をとりあげるべきであり、毛織物業・特に綿業と鉄工業がそれである事は略々異論のない所であらう。第二に、商業資本の再投資された部門は綿業に限られず、主として投機的部門、例えば土地投機、橋梁・道路及び運河建設、保険・銀行業及び製造業等であって、綿業への投資はこの時期の再投資の中でどの程度のウェイトをもちえたのか。

第三に、この商業資本の再投資の仕方は、直接事業に介入するといふよりはむしろ「共同出資者・投機業者・地主・貸金業者・投資家」としてであったのではないか。第四に、商業資本の刺戟の下に行われる産業資本の展開をどの様に評価し位置づけるか。即ち商業資本

の転化とそれを媒介とする産業資本の自生的展開の二つの工場制展開のコースの相互関係乃至絡みあい方をどう把握するか。第五に、ボストン、プロヴィデンス等の大商業資本の再投資されたローウェル、チョコピー、ホリヨーク等の工業都市以外の都市についてはどうか。別言すれば、大商業資本の再投資された地点は、輸送の便宜もさる事ながら、何より大規模な水力利用可能地であり、又その故に商業資本の投資は土地投機的、地代・利子取得の性格を強く示し、独占的水利権に執着して、保守的性格を否定できない。他方大水力の利用できない地点では、大商業資本を招致できなかったが故に、自生的産業資本は水力——より端的に云えば水利権——にしがみつかずに、反って蒸気機関を逸早く採用して大商業資本による綿業を凌駕する様になるのではないか。第六に、「資本主義の系譜」を我々が問題にする場合、資本家の社会的系譜乃至出自と、資本乃至資金の社会的源泉とは区別されるべきである。即ち、資本制生産の担い手、Trägerは誰かという問題と、資金を誰が出しているかという問題とは混同されるべきではない。過渡期に於ては、前段階の生産様式に結付いた資本は、有利でさえあれば、その投資がどの様な分野であっても、又危険を伴っても、敢て投下され得る。投資しているという事は必ずしも投資者が前近代的諸関係を擁護するものとしての生産的労働の担い手として立現われる事を意味するものではない。資金という間接的表現を通してみるならば、問題は投資の仕方であり、資金の社会的源泉の変化の、もつ意義であり、何よりもかか

れて了うであらう。ついにながらタウシング・ジョスリン以来の指導的実業家 business elite に関する研究にはかかる非歴史的方法が著しい。(これについては、高村象平・中村勝己、前掲論文第四節参照。)

(c) East, Robert A., *Business Enterprise in the American Revolutionary Era*. N.Y., 1938. 及び Martin, Margaret E., *Merchants and Trade of the Connecticut River Valley, 1750-1820*. (*Smith College Studies in History*, Vol. XXIV, Nos. 1-4, Northampton, Mass. 1939), Chap. VI, pp. 170-222. をあげておく。鈴木圭介氏の商業資本の三類型化(同氏「アメリカ経済史研究序説」一六一-二三頁)、マーチン女史の同様の三類型化(Martin, *Ibid.*, Introduction)、イーストの「国民的資本家」の性格規定をどう動的に理解すべきか、今後の研究に俟ちたい。尚ここで商業資本前期的資本といきなり等置する意外に多い見解を採らない事を明かにしておく。

(4) ハッカー、中屋健次・三浦進訳「資本主義の勝利」第一九・二三章。「ウォールサム型」の綿業部門のみを抽出する事なく、その経済的営みを全体としてとりあげる必要がある。その理由は本稿全体に明かである。

(5) チョコピー及びホリヨークの場合。

(6) フォール・リヴァー及びノーガタックの場合。

(7) ピレンヌ、大塚久雄・中木康夫訳「資本主義発達の諸段階」

アメリカ産業革命の歴史的特質

る投資を導く経済構造の変化そのものである。最後に、「間屋制前貸」と「家族ぐるみ雇傭」、「工場内の一貫作業」と「寄宿舎制」等を指標にして、企業近代性を云々する、余りに「経営史」的立場についてである。特定の経営形態は、資本及び労働の異なった社会的存在形態下に表われ得る。我々の問題は、かかる経営形態を、それ自体としてではなく、それを含む全社会経済構造の内部に於て乃至はそれとの関りに於て考察し、その歴史的性格を規定するにある。換言すれば、それにふき込まれた「社会的魂」の問題なのである。

さて、以上の問題を解明する為に、本稿では周知の三工業都市フォール・リヴァー、チョコピー及びホリヨークをとりあげ、いわゆる商業資本の再投資の全貌とその歴史的意義を考察する事にする。

(1) アメリカ経済史研究の動向の詳細については、鈴木圭介「わが国におけるアメリカ経済史研究の発展」(「外語文化」第二号。創立六十周年記念特別号)。鳥羽欽一郎「米國経済史の諸問題及び文献について」(一)(二)(早稲田商学第二二五号、一二八号)。高村象平・中村勝己「アメリカ経済史学最近の動向——産業資本の形成を中心にして」(社会経済史学第二〇巻四・五・六号)

(2) ここではつきり申して置くが、歴史的段階と意義を異にする凡ゆる産業部門を並列的に、均しいウェイトを置いて「偏らずに」考察する方法によっては、歴史の構造的特質は消去されて見失わ

巻末の大塚氏の解説中二一七頁注(8)参照。なおウェーバーの次の如き指摘を見よ。「近代資本主義の拡張の原動力は何かという問題は、まずもって資本主義的に利用される貨幣が何処から来たかにあるのではなくて、むしろ何にもまして資本主義精神の発展ということなのである。この精神が生気をえて活動しうるところでは、活動の手段たる貨幣を自ら調達していくのであって、その逆ではない。」(ウェーバー、梶山力・大塚久雄訳「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」上巻、七七頁。傍点引用者。)

ここで「資本主義精神の発展」というのは、歴史構成的に作用する生産力の主体的条件を指す。

(8) 「ウォールサム型」自体は、商業資本の製造業への転化とも、産業資本の自生的展開とも、又プランター・間屋商人とさえも結びき得る。前者については一々例示する必要もないであらう。最後者については、豊原治郎「米國南部における木綿工業の成立について」(大分大学経済論集四の一)及び「アメリカ南部木綿工業成立史に関する一考察」(大分大学経済学部創立三十五周年記念論文集所載)参照。「ウォールサム型」自体は歴史方向規定性をもたない事は明かである。

二

マサチューセッツ州トントン河畔の綿業都市フォール・リヴァー(1)は、元来ニュー・イングランドの他の地域に比しては気候よく、農

業には比較的恵まれていたとはいえ、余剰生産物の沿岸貿易と、水流を利用する製粉・製材・縮絨場と、造船業をもつ村落にすぎなかった。その商業・造船業も、マサチューセッツやロード・アイランド(例えばプロヴィデンス、ボストン、ニュー・ベッドフォード)のそれに比較すれば、重要性に乏しかった。併し農業には不利な自然的条件は製造業にとり必ずしも阻止的とは限らなかった。急な傾斜地形と豊かな水力の存在は製造業の発展には有利であった。地方的な原料を用いて、地方的市場向生産を行う製鉄及び鉄加工場、製材・製粉・縮絨場、これ等の地方的工業は、該地方の機械工、水車工、土地・水利権提供者及び流通資本提供者との結合によるものである。例えば「スワンシー工場」(一八〇六年設立)は、スワンシーの機械工ナタン・ウィーラー及びデクスター・ウィーラーとサマセットの水車工オリヴァ・チェイスがその設立に際し、夫々の技術的知識を以て紡績機械及び水車の製造に当った。「フォール・リヴァー製造場」(一八一三年設立) The Fall River Manufacturing は、前出機械工にして主な創業者デクスター・ウィーラー及び農民の子・半農半海運から出発し、スレイター工場で訓練を受けたデイヴィッド・アンソニーを生産の担当者とし、四名のジェントルマン(ボーデン家及びパウエン家各二名)は土地・水利権及び流動資本を提供し、他の個人一名(フォール・リヴァー及びトントン河畔の他のタウンの住民)は極く少額を出資して出発した。この「ジェントルマン」の性格を今少しく検討して見るとうである。早くも一七二四年——ニュー

・イングランドのタウン内部で土地集中が始まる時期が略々一八世紀の二〇年代である事を想起されたい——以降ボーデン家(Joseph Borden, Richard Borden)はケケチャン河畔の全水利権を手中に収め、一世紀を経た一九世紀初頭にはその所有権は主としてボーデン家・パウエン家及びダーフィー家に属し、これらジェントルマン達は農場経営の外上記製粉・製材場を営み、その蓄積資本・経営能力及び技術的知識を以て、更に綿業・毛織物業・鉄工業に進出せんとしていた。リチャード・ボーデンは青年時代父を助けてその農場及び製粉場で働き、やがて父に代ってその経営に当った。「フォール・リヴァー製造場」、「フォール・リヴァー鉄工所」の設立に際し有力な出資者として現われた。又トーマス・ボーデンもリチャードと同じ二企業に土地・水利権の提供者としてたも現われる。パウエン家については海運業者たる以外に詳細を知り得ない。以上に於て明らかな如く、「フォール・リヴァー製造場」の性格は、技術的担当者たる小生産者(機械工・水車工)と土地・水利権及び流動資本の提供者との特殊な結合方式であり、恐らくは——というのはパウエン家等の性格規定の問題が残されているからであるが——いずれも結局は農民・手工業者等の小生産者であると推定して大過ないであろう。「フォール・リヴァー鉄工所」(一八二一年設立)も、サムエル・スレイターの義兄弟にしてロード・アイランドの鉄・機械・織物業に活動したウィルキンソン家と、ボーデン家・ダーフィー家その他の土地・水利権及び流動資本との結合形態をとり、基本的に

は「フォール・リヴァー製造場」と性格を同じくする企業である。

さて、かかる中産的生産者層を担い手とする織物業・鉄工業の自生的展開を基盤とするフォール・リヴァーの将来性に着目した外部資本(特にプロヴィデンス及びニュー・ベッドフォード資本)が流入し始める。その代表的例は「ボカセット・カムパニー」である。これはニュー・ベッドフォードのクエイカー商人サムエル・ロドマンが「トロイ綿・毛織物業会社」の水利権の直ぐ下流のかなり水利権を購入し、トロイ会社の主な株主六名等と設立した水利権会社である。ボカセット及びトロイ両会社の所有する水利権はケケチャン河の瀑布点一二七フィート中の上流六八フィートを含んだ。この種の水利権会社は最初から応募資本で運転さるべき大工業を設立するというよりは、むしろ水力利用地を供給し、種々の工業に対し賃貸用の建物を建て、斯くてその投資の有利な収入を追求せんとした。この投資方式は、ローウェル、マンチェスター、サコ・ビドフォード及びバタースンを含む大織物業中心地が最初に発展せしめたメカニズムだった。このいわゆる「賃貸工場 apartment factory」方式は成功し、一八三二年フォール・リヴァーの製造会社二一申一五がこの賃貸工場(その大部分はボカセットの建物)を賃借していた。商業資本が転化して来た際のこの特徴的形態(或いはその一層露わな形態)については後段で触れる事にすが、このような地代取得者の性格が商業資本の転化の何よりの特徴なのである。

次に今一つのこれと関連する興味ある現象を指摘しておこう。そ

アメリカ産業革命の歴史的特質

これは「賃貸工場」の一部分の賃借人の中から而も専門化した製造業者が現われて来る現象である。例えば前述サムエル・ロドマンの義子アンドリュース・ロブソンは、ボカセットの建物の一部を借り綿布捺染を始めた(一八二五年)。又今一つの専門化工業の例は織物業・鉄工業である。従来この種の機械の製造・改良はその為に雇傭された職人により、織物工場内部の機械工場で行われていた。ハリス&ホウズ機械製造会社はボカセットの建物の他の部分を賃借し、ボカセット工場の為に、より古い会社の設備の増加だけでなく、機械の多くを製造した。

ここでフォール・リヴァーの製造業の歴史的特質を概括すればこういう事ができよう。

(1) その綿業・毛織物業及び鉄工業の担い手は農民・手工業者或いは地方的商人の中から次第に富を蓄積して上昇しつつあった者であり、土地・水利権等の提供者さえ基本的には同じ性格の中産的生産者層の上層と見られる。彼らは地方的原料を加工し地方市場の為に生産しつつ、次第にその市場圏を拡大して行った。(2) 労働力は周辺の農場及び村落から得られた。一八二〇年を境にニュー・イングランド農村人口が分解して一方では工業村落・町・都市へ、他方では西部へ移動して行った事は周知の事実である。(一八四〇年代に入ると廉いイングランド及びアイルランドの労働者が流入して来る事は申す迄もない。)(3) プロヴィデンス、ニュー・ベッドフォード等の商業資本が投資されているが、その投資の仕方は地代取得者の

ある。又トントン河、ケケチャン河の水力は比較的小規模な為、ボストン等の大商業資本が流れ込まなかつたが、その為一時はボストン系工場に圧倒されるが、一八四三年以降「鉄工所」グループがいち早く蒸汽機関を採用し、逆にボストン資本を抑えて行く。これは土地・水利権にしがみつかざるを得ない様な巨大商業資本が入っていなかつた為である。而も商業資本の営む「賃貸工場」の借借人によって様々な製造業が営まれ、而もかなり専門化された部門、特に織物機械の生産が独立し始めてるのが見られる。総じてフォール・リヴァーでは大商業資本を惹きつけるに足る大水力が不幸にして(実は幸にも)利用できなかったし、流入した商業資本も大きな意義をもち得なかつた。そして自生的な農村工業の展開が(素よりその途は平坦ではなかつたが)、次第に全機構的なウエイトをもつに至つた。(4) 最後に、ボストン製造会社等の「ウォルサム型工場」が力織機の導入・発展に果たした役割を過大に評価する点に關してである。スレイターの義兄弟ウィルキンソン家はそのポータケット機械製造場で一八一六年以降ギルモア織機の製造を始め、その影響は直ちに波及し、一八二〇年代に力織はフォール・リヴァーでは珍しくなかつた。然りとすれば、産業技術系列展開のプロセス及びそのテムポに於て前期的資本の果す進歩的役割は全機構的には意外に低いのではないか。換言すればその力織機導入に關する独占的地位が余りにも早く且つ簡単に崩壊して行く点こそ或いは崩壊させて行く歴史的諸条件の広汎な成熟にこそ正しくアメリカ的な特質がある。

されて次第に重要性を増して行くに反し、プロヴィデンス及びニュー・ベッドフォードのそれは一時的投資に止まり再投資されなない為、次第に重要性を失つて行く、というスミスの見解は興味深い。が、前居住地・営業地別という分類法は、自然的、「工業立地論」的なきらいがある。

(6) この外、この直後にダクスター・ウィーラー、トロイ会社も織機を製造している (Smith, Op. cit., p. 24)。

(7) 五例参照。

三

下層中産階級に独立手工業者が、新商人又は小生産者として工場労働者に分解して行く過程、旧村落共同体が工業町の母胎となる過程、或いは共通の伝統と教会とを有する社会層の資本と労働への分解過程、そうした過程が正しくニュー・イングランドの典型的な産業資本の形成過程なのであるが、併しそれは普遍的ではない。コネティカット河上流の工業都市チコピーは、ローレンス、ローウエル、マンチェスター(「ホリヨーク」引用者)等と並んで、先行経済段階からの漸進的工業化の過程を経る事なく、ボストン資本による人工的建設都市・「会社都市 company town」であり、自生的展開との絡み合いが最も典型的にみられた例である。

元来肥沃な河川流域に位したチコピーは、パブスト女史のいわゆる「低地タウン lowland town」として、同時に交通の便と豊かな

アメリカ産業革命の歴史的特質

るのではないか。

- (1) フォール・リヴァーに關する史実は、Smith, Thomas Russel, The Cotton Textile Industry of Fall River, Massachusetts: A Study of Industrial Localization, N.Y., 1944. に依拠した。特に必要のない限り煩雑さを避ける為に一々引用する事を省略する。以下同じ。なお豊原治郎「アメリカ産業資本の形成」(大分大学経済論集第九巻一号)参照。
- (2) 平田宣道氏のオリジナルな研究「タウン・システムの研究」その一五、(明治学院論叢三八・三九・四〇・四四・四六号)、特に「ニュー・イングランド植民地における土地集中」(「アメリカ経済史研究会」に於ける報告)。欧文文献は同氏の論文を見られたい。
- (3) 鳥羽欽一郎「一九世紀初頭南部ニュー・イングランド地方における農村構造」(社会経済史学第二三巻三号)所載の文献を見られたい。
- (4) 水力の規模の問題は、ボストン資本を惹きつけなかつた事を説明しても、それが如何にして自生的な農村工業の展開の中にくみこまれて、生産力として発現したかを説明しない。
- (5) この点スミスの興味あるフォール・リヴァー製造業出資者の投資前の居住地・営業地別の表を見られよ。(Smith, Op. cit., p. 30. 33)。フォール・リヴァー及び近隣タウンの資本は再投資

水力に恵まれた「工業タウン industrial town」であつたが、不幸にしてその農村構造については全く知る所がない。最初の入植以来チコピーは一世に亘り互って農業を中心としていた。チコピーの工業化は二つのコースをとる。先ず、植民地時代末期から一九世紀初頭にかけて小規模な工業が勃興して来た。どのタウンにも見られる小工業の中から勃興して来る織物業と鉄工業がそれである。(a) 織物業。第一に家内生産者から困難な作業「梳毛・仕上・染色工程」を引受けて專業化して来る者が現われたが、原料は所有せず、雇傭者であると共に被傭者でもあつた。Gustavus Pinneyの小縮・毛織物「工場」がそれである。この様な漸く專業化した手工業者より更に発展した形態はChapin millである。William, Levi, Joseph Chapin [恐らく原所有者の子孫]が、一八一〇年梳綿機二台、Drawing frame 一台、粗末な構造の紡綿機二台を備え、六一八名の労働者を雇傭し、現物賃銀(織物又は織糸)で綿糸を生産させ、この職場主に属する綿糸を近隣の婦女子家内労働者に前貸して、手織機で織布せしめ、これを集めて売却した。この様なようやくマニユファクチュアに達したかと思われる綿業部門より一層目覚ましいのは(b) 鉄工業である。既にスプリングフィールドのJames Byres及びWilliam Smithはチコピー瀑布の土地・水利権を賃借し、鉄工所を設立していたが、これが数人の手を経て一八〇一年 Benjamin Belcherの手に渡り、一八〇五年彼の単独所有に歸した。その市場はスプリングフィールドだけでなく、更に広くハートフォード、ウ

「スター、ノーサムプトン及びグリーンフィールド」に迄求められた。併しベルチャー鉄工所の飛躍的發展を齎したのは、ボストン資本によるチョコピー最初の綿工場「チョコピー製造会社」への大量の土地・水利権の売却であった。ベルチャーは彼の財産の大部分の売却代金を以て拡張資金とし、チョコピー製造会社の機械工場その他へ鋳物を供給した。この他に製紙場・製材場・製粉場も見られた。併しシュラクマン女史は、この様な土着自生的産業は、大水力を開発してチョコピーを工業中心地に変える力をもっていなかった。東部マサチューセッツの資本こそ新綿工場の設立によりチョコピーの漸進的工業化の過程を断ちきり、段階的發展をこえて一挙に飛躍的に工業社会化したのだとして、一八一五―一五〇年のニュー・イングランド綿業は「語の凡ゆる意味で近代的だった」とする。そこで我々は、シュラクマン自身の研究に依拠しつつ、ボストン商業資本再投資の実体は何かを今少し究明する事が必要である。

一群のボストン資本家は、前述せる如くベルチャーから大量の土地・水利権を購入し、The Boston and Springfield Mfg. Co. (一八二三年設立、資本金五〇万ドル)を組織し、ダム・運河・綿工場及び労働者用住宅を建設して、チョコピーにその巨姿を現わし始めた。綿工場は逐次第四工場迄建設され、資本金も七〇万ドル(一八三五年)に達した。一八二八年、会社は「チョコピー製造会社」と改称された。この会社の機能たるや誠に興味あるものである。それは当然、(1) 綿工場であるが、それだけに止らず、(2) 不動産業を営

む。即ち、会社の所有する大量の土地・水利権・労働者住宅中、会社自身使用するはそのほんの一部に過ぎず、大部分は有利な方法で売却・賃貸される。(3) 建設業。即ち建物・ダム・運河の建設部門。(4) 機械工場。即ち綿業機械の製造・修理、新会社への機械類供給部門、という四つの部門を包含した「混成会社 Hybrid company」である。後に綿業部門と建設・機械部門とは、法的にも帳簿上も分離され、後者はThe Springfield Canal Co. (一八三一年設立、資本金九万ドル)となった。チョコピー製造会社が単純な綿業会社でなく、不動産及び機械供給の独占的地位を通じてチョコピーの經濟發展を支配した。而もこの現象はチョコピーのみに止らず、ボストン商業資本の行く所には必ず見られた。

さて、然らばかかるボストンの支配体制は永くつづいたか。確かにボストン系統の工場が統々と設立されて行くのを見れば、その支配は一九世紀の前半を通じて鞏固であった事は明かである。E・ドゥワイトがチエラムスフォードの刃物業者 Nathan Peabody Ames 一家に勧めてチョコピーに來任せしめ、道具・刃物を製造せしめた(一八二九年)が、間もなく「エイムス製造会社」が組織され、キャボットヴィルに移動した(一八三四年)。資本は次第に増大し、一八四五年には「スプリングフィールド運河会社」の諸財産を引継いで二〇万ドルに達し、綿業機械製造工場をも包含した。又チョコピーの下流水利権に位した「キャボット製造会社」(一八三二年設立、資本金五〇万ドル)は綿・毛織物、鉄・機械類を製造した。以上に

加えて「パーキンズ工場」(一八三六年設立、資本金五〇万ドル)及び「ドゥワイト製造会社」(一八四一年設立、資本金五〇万ドル)の四会社は、同一の資本家の管理下にあり、「スプリングフィールド運河会社」から土地・水利権を購入し、出資者は大部分ボストンに居住した。かくてシュラクマンは曰く、「この事を知れば、チョコピーを工業都市化した資本の源泉及びその所有権の性質を辿る事は出来る」と。併し我々の問題にしているのは、チョコピー綿業の「資本の源泉及びその所有権の性質」ではなくて、ボストン資本乃至ボストン・アソシエイツのチョコピー經濟構造の發展に対してもつ意義である。別言すれば、ボストン資本によるチョコピー綿業——実は綿業だけでなく、少なくも綿業と並んで不動産投機業・機械製造業・建設業等——が、どの様な歴史的・社会・經濟体系に連なるかという問題である。シュラクマン自ら——恐らくはその方法的意義を自覚せずして——ボストン・アソシエイツと、次第に發展して来る小規模な地方的製造業者との間には本質的差異がある、と述べている所以である。

この様なボストン・アソシエイツによる綿業は、現地在住代理人の監督下に生産を行い、生産物はボストン仲介商人の手を通じて売却された。金融も、重要な金融業務はボストンで、小口金融や貸銀支払はスプリングフィールドで済ませたから、チョコピーに金融機関をもつ必要はなかった。政治的にもチョコピーに於て自治権を要求する必要を認めなかった。併しこの様な不在所有の経営下のチョコ

ピーにも、いくつかの面から自生的な發展が展開して来る。「中産階級の勃興」がそれである。中産階級には次の四つがある。(一)商人(独立の各種サービス提供者を含む)。新中産階級の中で指導的地位を占む。(二)高級熟練工。高給を食み、社会的にも宗教的にも、未だ富裕とならぬ実業家・自由業者と同じ地位を占む。(三)綿工場の代理人・監督者。その高給を蓄積して、該企業に投資し次第に自らの比重を増して行った。或いはその蓄積資本を以て新企業を現地で始めた。(四)地方的小製造業者。その特徴は地方的需要に応ずる自生的な小生産者である。その存在を可能ならしめたのは、チョコピーの急速な經濟的發展と人口増大、局地的生産者による小生産物への綿工場の需要、嵩に比し高価な生産物が高い輸送費を償って一定の市場をもった等の事情であった。先ず(1) 綿工場への生産手段の供給。The Williamsett Card Mfg. Co. (一八二九年設立)は近隣を対象に梳刷子及び小鉄器を、一七名の男子・少数の女子を雇傭して生産した。所有者 Stephen Bemis はジョージ・ピース所有の店舗の書記から出發して、後この店舗を買取り、この店舗経営を通じて蓄積して、梳刷子次いで鉄器生産を始めた。チョコピーの綿工場を主たる市場としたが、西部マサチューセッツの小工場にも売却した。一八四〇年スプリングフィールドに工場を移し、The Bemis and Call Hardware Co. として出發した。又糸巻生産者 Benning Leavitt、箆及び織機生産者 J. Alden 等をあげる事ができる。(2) 地方的な帽子・ブラッシン・帚・馬具・

従属させる事を余儀なくされる。

- (1) チョビーに関する史実は Shlakman, Vera, *Economic History of a Factory Town, A Study of Chicopee, Mass.*, (Smith College Studies in History, Vol. XX, Nos. 1-4, 1935) Northampton, Mass. に於いた。豊田一助「アメリカ合衆国における産業資本の形成過程について」(『早稲田商学』一一二号、一三二号)
- (2) 以上については Shlakman, Ibid., pp. 12-15.
- (3) Pabst, Margaret Richards, *Agricultural Trends in the Connecticut Valley Region of Massachusetts, 1800-1900* (Smith College Studies in History, Vol. XXVI, Nos. 1-4, 1941) p. 4 note, 17, 67.
- (4) 一八一二年の燐鉱炉用石炭を求めた広告によると「メルチャーはスプリングフィールド所在のJ&E・ドゥワイトの店舗を通じてその勘定の決済をしていた。ドゥワイトは地方製造業者の「金融又は交換代理人」としての役割を果していた。これはスプリングフィールドの市場としての重要性による。
- (5) Shlakman, Ibid., pp. 24-25. 第二章冒頭で女史は「資金は各地域の主な産業から製造業に流込んだ」というあの有名なクラークの提言(Clark, Victor S., *The History of Manufactures in the United States*, N.Y. 1949, Vol. I, p. 192)を

ブリキ屋。(3) 製靴業。(4) 毛織物業。ベミス移出後の工場を購入又は賃借し、二五名の男女を雇傭したウィリマンセットの毛織物工場。その他に列挙しないが、これらの地方的小製造業者は、ボストン綿業を媒介とし或いはその間隙を縫って勃興して来た。併しなんといっても自生的産業の最も着目すべきは鉄工業である。

鉄工業の例としてここでは二つの例をとりあげる。(1) The Chicopee Falls Co. (一八三六年設立、公称資本金一八三六年二・五万ドル、一八三九年一〇万ドル)は鉄器及び火器製造を目的として組織された。この会社は主体的にも資本的にも小商人・金属業者及び管理職に由っていた。詳細は不明であるが、一八四一年破産し、全財産はエイムス製造会社を買取られたが、一八四九年旧社長カーター等により買戻された後はビストルの生産を開始し The Massachusetts Arms Co. として火器・マシンその他の機械類を製造した。(2) The Belcher Iron Works. ベルチャー及びその三人の息子は夙に鉄工業に従事していたが、一八四六年以降はウースターの農機具工場に雇われていた John R. Whittemore を加え、鉄道の到来と相俟って、専ら農機具(主として鋤)生産に乗出し、国内は勿論、遠く南米に迄も輸出した。ともあれ、これらの鉄工業は文字通りの自生的展開が直接生産者を担い手として行われた典型的部門であり、ボストン資本下の現地代理人・支配人層の拾頭と相俟って、ボストン・アンシエイトの比重を次第に減じて行く。一八五七年の恐慌はボストン資本に打撃を与え、残る者は産業資本の利益に自らを

ボストン資本流入後にのみ正しい命題だとしている。かかる観点に關しては本稿一で触れた。

- (6) ホリヨークの Hudley Falls Co. (ボストン資本による買収後、分割前のそれ)を見よ。なお五参照。
- (7) Shlakman, Ibid., p. 28. 傍点引用者。
- (8) Shlakman, Ibid., pp. 46-47. 「商人・銀行家・議員・製造業者・鉄道建設者」或いは「驚くべき『近代的な』種類の資本家企業」と、「ニュー・イングランドの多くの端初的工業中心地に於て、徐々に目立たぬ規模で発展しつつある製造業の単位である『局地的』企業の比較的小規模性」「本質に於て純粋に『中産階級』」との対比を見よ。

四

コネティカット河上流のホリヨーク⁽¹⁾はニュー・イングランドにありきたりの村落にすぎず、附随工業をとまなう自給農業と家畜飼養に水力作業場を加えた寒村だった。一八世紀半ばにはコネティカット河上流への入植が進むにつれ河筋の商業も漸く盛んとなって来た。独立後コネティカット河流域の主な商人達が、サウス・ハドレー・フォールズを迂回する運河建設を企て、"The Proprietors of the Locks and Canals on Connecticut River"の特許状を受けて一七九四年ダム工事を完成した。この商業的刺戟の下にサウス・ハドレー・フォールズには製造業が始められた。製粉場・製材場・麻

アメリカ産業革命の歴史的特質

実油製造所の外製紙場が設立された。その一はスプリングフィールドの富裕な店舗主⁽²⁾ハワード&ラスロップ製紙場、その二はスプリングフィールドの著名な製紙業者エイムス家の製紙工場である。他方対岸のアイランドにはエンフィールド資本家達が所在の縮絨場を買収して The Hudley Falls Co. を設立(一八三二年)した。

この漸進的なしかし確固たる歩みは一八四二年ノースampton人による鉄道敷設計画により突如破られた。この創業者達はアイランド地区の発展を見越して土地買占めを計ったが、そこには Hudley Falls Co. が先在し成功しなかった。四五年鉄道開通後この地方の鉄道資本家及びボストン綿業資本家らは G・C・エヴィングを介して該地区の農民達の土地と、Hudley Falls Co. の全財産を手中に収め、一万数千エーカーの土地・水利権三〇万ドル、その改良費をあわせて二五〇万ドルという巨額の資本を以て、新 Hudley Falls Co. は発足した。株主はその経営を重役団に委ね、重役団は結局仲間商人ジェイムス・W・ミルスを収入役に選び、現地代理人及び技師を監督せしめ、水利権をグラスゴー会社(新たに組織された綿業会社)及びカルー製造会社(ハワード&ラスロップ製紙会社の監督によって作られた製紙会社)に賃借し始めた。四九年にはアイランド地区には食料及び衣料商店が叢生し(約三〇名)、農村店舗主・大工・法律家・医師等が流入し、土地売買は活潑化した。Hudley Falls Co. は四九年末迄に五九の土地を売却した。五〇年の不況を

契機としてポストン不在所有者の無能に対する非難が起り始めた。又アイルランド人労働者の大量流入と被救恤貧民の発生が見られた。五一年景気回復を機に高級薄物寒紗を製造する第二工場設立と第一工場の完全操業を以てしても利益思わしからず、他の製造業者達も工場敷地を買控えていた。会社はここで土地売却及び水利権賃貸と、それに伴う機械工場への需要獲得とに努力し始めた。その最初の結実がポストン商人 P・T・ジャクソン等との「裝飾品工場」設立契約である。併しこの種の不動産の改良には更に巨額の資本を必要としたが、株主への配当金は六カ年に亘って行われていない為、株主達は注意深い財産管理、機械工場への需要喚起、土地・水利権獲得への刺戟の提供を要望した。かかる事情の下にありながら、重役達はパーソンズ製紙会社が土地購入と水力賃借を申し入れた時、「残る唯一つの工場用地は、製紙工場に比し何倍も労働力を雇出出来る大綿又は毛織物工場の為に空けておきたい」という理由で「製紙業の様なチップケな事業」を奨励しなかった。この様な商談拒否の根柢には基本的生産手段たる土地・水利権の独占者としての地位と、それを通じての土地投機があったのである。五四年になっても好況は到来せず、株主達の要求により、この Hudley Falls Co. は、水力・不動産部門及び機械工場 (Hudley Falls Co.) と、綿業部門 (Lysman Mills) に分割された。この様な分割方式はポストン資本投資の普通の形態で、チョコビー其他に於ても見られる。⁽⁶⁾「併しこの様な財産の分割も、水力会社の態度と利益に殆んど

変化を与えなかった。⁽⁷⁾パーソンズ製紙会社第二工場・ホリヨーク製紙会社等の設立にも拘らず、五七年の恐慌を切抜ける事ができず、会社は五八年競売に附された。旧 Hudley Falls Co. 社長アルフレッド・スマスはスプリングフィールドの鉄道資本家・嘗てのポストン綿業資本家団の代表者チェスター・W・Chapin を破って競落し、「ホリヨーク水力会社」The Holyoke Water Power Co. が組織された。ここにポストン資本の支配は終焉を告げ、⁽⁸⁾後には大ダムと工業村落だけが遺った。ホリヨークは新たな主人に首を垂れた。嘗ての卒伍の中から次代の担い手が現われた。五九年以降のホリヨークの基本動向は少なくとも四つを数える事ができる。(1) 綿業部門ではポストン資本の支配は依然つづいた。「ライマン工場」や「ハムプデン工場」の繁栄はこれを物語る。併しそれらと並んで不在所有者でない例も見られた。バプティスト Timothy Merriok の「メリック製糸会社」がそれである。毛織物業は戦時閉税や政府の軍需品調達に刺戟を受け繁栄した。アイルランドの敬虔なルター主義の毛織物業者ストゥルベルグ Spühberg 兄弟の営む「ゲルマニア工場」は指導的地位を占めた。(2) この頃から工具類、農機具、鋸山機械、機関車、タービン及び綿業・製紙業機械への需要が昂まり、著名な「ウィティン機械工場」の外、多数の小規模の機械・道具製造場が叢生した。旧 Hudley Falls Co. の機械工達を主体とする「ホリヨーク機械会社」George W. Prentiss の針金工場を始め、一握りの機械工による多数の小製造場がそれで

ある。(3) 併し南北戦争後にかけて、ホリヨークの指導的産業になったのは製紙業である。前述「パーソンズ製紙会社」の創始者 Joseph C. Parsons は、一六三六年ウィリアム・ピンチンと共にコネティカット流域に入植した一人を祖とするが、彼自身については多く知られていない。一八六〇年代には合衆国最大の書字紙・包装用紙の生産者となった。「ホリヨーク製紙会社」は、パーソンズ工場の一職長により発起され、後錫器巡回商人グリーンリーフ Greenleaf 兄弟に売られた。Oscar H. Greenleaf は錫器巡回商人として、パークシャー丘陵地帯を歩き、農家主婦から錫器と交換にえた襪襪を取引しつつ、製紙原料商人と関係を結び、自己の資本を蓄積して、製紙業者への原料供給を行った。南北戦争中の紙価騰貴を利用して、かねて売込先だったホリヨーク製紙会社の所有者となった。又このホリヨーク製紙会社の帳簿係 William Whiting は、販売員時代に契約関係を通じて広く紙業界に知己を得、六五年資産家と提携して資本金一〇万ドルで新会社「ウィティン製紙会社」を始めた。旧針金工場を購入し、良質書字用紙を生産した。この他建築業者ニュートン家の「ハムプデン製紙会社」、「ホリヨーク・マニラ会社」については単に指摘するに止める。ホリヨーク製紙業は、農民がその土地を改良・売却して小額の資本を工業に投資するか、小商人が次第に蓄積して繰上って行くか、又は小手工業者が上昇して行くか、の三つの途を経て発展した、典型的な農村工業なのである。機械工業も略々事情を同じくし、毛織物業・綿業に至る

アメリカ産業革命の歴史的特質

と次第に大商業資本による不在所有性が強くなる。而してホリヨーク工業の中心は、綿業から——それを媒介として——機械工業、なかならず製紙業に移行する。(4) 最後に、これらの過程の根柢には Hudley Falls Co. → Holyoke Water Power Co. という土地・水利権所有のあり方の変化、特に七一年を境とする「ホリヨーク水力会社」の性格変化の問題がある。これはポストン商業資本家 ↓ 土着資本家という資本所有者の変化以上に——というのは、アルフレッド・スマスの手に渡って以後も、水力会社の性格は必ずしも変化したとは云えないものがあるからである——寧ろ水力会社をして自らの性格を変えざるを得ざらした機械工業、なかならず製紙業を中心とする小生産者・小商人の自生的展開の抑えがたい圧力によるものと見るべきであろう。

(1) ホリヨークに関する史実は Green, Constance McLaughlin, Holyoke, Massachusetts, A Case History of the Industrial Revolution in America. New Haven, 1939. に依拠した。

(2) Martin, Margaret, Op. cit., pp. 199-200. Dwight 家 Justin Ely, Levi Shepard などが主な人物である。各人については Martin の該書箇所 Hannay, Agnes, A Chronicle of Industry on the Mill River. (Smith College Studies in History, Vol. XXI, Nos. 1-4, 1936) を参照すべし。

資本と見るべきか。

五

さて、以上に於て、ボストン等の商業資本の産業資本への転化といわれるものの実体を少しく検討した。ここで今一度概括して見るならば、こういう事になるであろう。

(一) ボストン商業資本の再投資は、単に(1)綿業部門に止らず、(2)織物機械製造部門、(3)不動産部門、(4)建設業部門を含む。これらの四部門は単一企業の内部に含まれる事も少なくなく、特に当初に多く見られた。かかる「混成会社」は実にボストン資本の再投資の意味する所を最も端的に示している。即ち、(a) 土地・水利権の買占めとその開発後の売却・賃貸は、出資者達が東部・西部の各地で行っていた土地投機と本質的に同一のものである。自己使用を超える土地・水利権を独占し、その売却・賃貸は必ずしも開放的とはいえないし、綿工場設立そのものが地価騰貴を招く。会社もそれを狙っていると思われる節も感ぜられる。購入は「投機を避ける為」に「極秘裡」に、購入価格は「時価」で、改良後の地価の暴騰——これは土地投機業者以外の何ものでもない。(b) 機械製造部門を綿業会社が内包したのは、元来は自己工場用機械の製造の為であるが、それ以後は近隣工場の為にその製造・修理を行った。当時の輸送の便宜を考慮すれば、機械製造を通じて近隣を支配する事は少なくとも初期に於ては可能であった。(c) 建設業についても事情は基本的には同

6子会社 Proprietors of the Upper Locks and Canals on the Corm. River 及び Martin, Ibid., pp. 199-200.

(e) このエンフィールド資本家の性格については明かにし得ない。社長アルフレッド・スマスは後ボストン資本と競売に於て争うに至る。尚、次注(8)及び本節四末尾参照。

(4) Green, Op. cit., p. 37.

(5) 「如何なる企業もローウェルでは Locks and Canals の土地以外には有利に立地できなかったし、如何なる水車も Locks and Canals の水によらずしては廻転する事は出来なかった。」(Gibb, George Sweet, The Saco-Lowell Shops; Textile Machinery Building in New England, 1813-1949. Harvard Studies in Business History. Vol. 16) p. 31. ローウェルでもホリヨークでも、事情は基本的には同一なのである。

(6) 五参照。

(7) Green, Op. cit., p. 40.

(8) 個々のボストン商人が、特に綿業に於て残存した事は否定できないが、他の工業部門、即ち機械工業、特に製紙業の自生的展開によって、その意義は減少して行くのである。尚ここでアルフレッド・スマスの性格をグリーンは「綿業王よりその目的はヨリ一般的で、彼のヨリ弾力性のある態度により町は利益をうけた。ホリヨークは喜んだ。」(Green, Ibid., p. 64) としているが、土着性のヨリ強い、或いは地方的な利益にヨリ接近している

一である。さてこれらの四部門は次第に分割されて行く。先ず綿業部門以外が切離され、更に不動産・建設部門と機械製造部門とが分離されるが、それによって「水力会社の態度と利益に殆んど変化はなかった」事は既に指摘した。分割は経営内部からの要求であるが、資本そのものの性格を変えるものではないのである。

(二) 大商業資本による諸製造会社の商業独占的性格。製品市場を協定し、大出資者(例えばローレンスマイルズ)自身が販売代理人として製品販売を独占し、従ってその販売利潤もアソシエイト内部に独占された。又技術・生産費などの情報の交換が相互間に行われた。

(三) 不在所有者的、地代・利子取得者の性格については詳言の要はないと思う。既に形骸化したピュリタニズムは倒錯した選良意識と厳格な労務管理政策となって表われ、他方工場都市の様な田舎には不愉快且つ可笑しくて住めなかつたのである。在住資本家が例外視された事もその逆の証拠に外ならない。かくて再生産も技術革新をも無視した高率配当をむしり取ろうとしたのである。

(四) ボストン商業資本による力織機の導入の意義について。(a) ボストン商人の中にはローウェルの如き技術に関心と熱意をもつ者もあつたが、すべてがこの様な「国民的自覚」をもった者はかりではなく、単に高利潤に惹かれて、不振な商業に未練をもちつつ投資だけをした商人も少なくない。(b) スレイターにせよ、ローウェルにせよ、その熟練工を植民地以来のニュー・イングランド農村の半

アメリカ産業革命の歴史的特質

農半工の小生産者に依存せざるを得なかつた。「十九世紀初頭の工場組織は植民地時代の仕事場とは明確に異なるが、産業革命の初期に於ては、アメリカの機械工の知らない基本的技術的熟練というものは驚く程なかつた。」ボストン製造会社のポール・ムーディは正しくその典型的な例である。これは母国イギリスから継承され、ヨリ自由な土壌に移植されて、展開して止まぬ生産力的遺産そのものである。而もウォルサム工場で訓練された労働者が、嘗てのスレイター工場のそれと同様、顕著な移動を示している事実は、かかる熟練技術が急速且つ自由に各地に移植された事を物語る。(c) 技術導入に関するボストン系工場への地位は必ずしも独占的とは云えない。

既に一八世紀末葉以来織機の発明はいくつか行われており、ボストン製造会社の記録によれば、一八一四年二種類の織機を技術的に参考にする為に購入している。ボストン系工場の技術上の独占的地位は一八二五年迄であり、この頃を境に、ニュー・イングランドの内外に於て技術上の発明・改良と機械製造が抑え難い力を以て展開して来る。ロード・アイランドとウォルサムの技術・機械は当初は互に孤立し競争関係に立たなかつたが、輸送の便宜の増大は、両者を競争場裡に投じた。ボストン系工場はこの頃から次第に技術革新に消極的となり、他の発明した機械の中で最も評判のよいものを選んで、特許使用契約下に代理人として製造に従事する様になった。

(四) ボストン・アソシエイトの歴史的な性格。この問題を全面的にとりあげるのは次の機会にしたいが、ここでは若干気付く点だけを

指摘しておく。ジョサイア・ドゥワイト⁽¹⁴⁾の如く、スプリングフィールドの店舗主から出発し、次第に経営を拡大して、数個の店舗をチェーン・ストア的に経営しつつ蓄積し、信用授与者・金融業者としての機能をも営み、又ポータッシュ・鉄製造、前貸制による靴下製造、船舶所有、而して最も重要な公債・手形・抵当及び不動産投資を通じて巨富を積んだあの上昇・転化過程の示す意義である。そこには農村小商人から出発して次第に蓄積基盤を多様化する一方、地域的にも隔地商業へ連なっていく、その様な過程を通じて、それ自身の社会的性格が変って行く過程、而してその集中的表現はドゥワイト家のボストンへの移動と、婚姻関係によるボストン商人貴族社会への加入であるという事実、更にこの様な商人がハミルトンのフェデラリズムの熱烈な支持者である事実、ボストン・アンソニエツとフェデラリズムの訣別⁽¹⁵⁾……等の問題をどう考えるべきなのか。

(内) ボストン・アンソニエツのかかる動きに対し、産業資本の自生的な展開をどうつかむかという問題⁽¹⁶⁾。この自生的展開は三つの局面から行われる。(1) ボストン系工場の代理人・技術者・監督等の現地在住者の中からその高給を蓄積して、経営権を掌握するのみならず、資本的にも不在資本家の比重を減少させて行く。又その蓄積によって新たに企業を創める者も現われる。(2) ボストン系の水力会社から工場の敷地・水力・建物などを賃借している者が次第に上昇して来る。(3) ボストン資本の支配が行われない地域——その典型はかのノーガタック——での農民層分解の中から上昇して来る自生

的な農村工業。この(1)(2)と(3)は、商業資本の支配を撥ね返しつつ、或いはその存立の基盤を崩壊しつつ、手を携えて展開して来る。これを逆の面から見ると、ボストン資本が異常な利潤と不振という矛盾に悩みつつ、破滅して行くか或いは自己を変質させて進行する事態に適応せざるを得ないという過程がある。更にこの関係は西部に再生産されて、土地投機業者 対 自由農民 としてあらわれ、窮極的には後者が前者に圧倒して行く。そうしたコースが正しくアメリカ的な近代化の特徴なのではないか。

(1) ボストン・アンソニエツ全般については、Martin, Shlakman, Gibb, *passim* の外 Josephson, Hannah, The Golden Threads: New Englands Mill Girls and Magnates, 1949. を挙げておく。豊原治郎「Boston Associates の経済史的意義」(大分大学経済論集六の二)、鳥羽欽一郎「アメリカ合衆国における産業資本の形成過程について」(三) (早稲田商学一三二、一三三二号) 参照。

(2) Martin, *Op. cit.*, pp. 179-183.

(3) Gibb, *Op. cit.*, pp. 65-6 及び note 3.

(4) 次の如き表現を見よ。「機械工場は要石⁽¹⁷⁾」(Gibb, *Op. cit.*, p. 63.)

(5) 前述したチロビーのチロビー製造会社からスプリングフィールド運河会社が (Shlakman, *Op. cit.*, p. 36) のコメント

ドのヨーク製造会社からサコ水力会社が (Knowlton, Evelyn H., Peppereh's Progress. History of a Cotton Textile Company, 1844-1945. Cambridge, Mass., 1948, pp. 8-10)

分離された例を見よ。それらの原型は「メリマック製造会社の機械製造部門と土地・水利権部門との The Proprietors of the Locks and Canals on Merrimack River の移譲による」。

(Gibb, *Op. cit.*, Chap. III.)

(6) 例えばホリヨートのティモテイ・メリマックを見よ (Green, *Op. cit.*, p. 73, 79)°

(7) 例えば「エリオット製造会社は「普及した型の未改良の織物機械の使用以上の何ものかを示したという証拠は何もな」。(Gibb, *Op. cit.*, p. 16)°。マーキンスの「関心は依然第一に商業であり、製造業との関係は投資者のそれであった」(Gibb, *Ibid.*, p. 16)°。其の他の例は一々あげぬ。

(8) Gibb, *Ibid.*, p. 10.

(9) Gibb, *Ibid.*, p. 12.

(10) Gibb, *Ibid.*, pp. 53-54.

(11) Smith, *Op. cit.*, p. 24; Gibb, *Ibid.*, pp. 76-78.

(12) Gibb, *Ibid.*, pp. 13-14.

(13) Gibb, *Ibid.*, pp. 78-80. 但しイギリス式のギヤ・システムに代るハルト・システムを以てした如き改良も無いわけではな

5.

(14) Allen, (ed.), Dict. of Am. Biography. シュタムト家の頁。Martin, Shlakman 証書書をも参照せよ。

(15) Martin, *Op. cit.*, Chap. VII. 特し pp. 231-264. の興味ある記述を見よ。

(16) この自生的展開については別稿を期して置く。ここでは「応の見透しだけ」で止めた。

(17) エリントン教授はマイン教授の西部土地投機業者の四類型化 (Gates, Paul Wallace, The Illinois Central Railroad and Its Colonization Work, Camb. Mass., 1934, pp. 110-119.) に関説し、辺境人の分類によると投機業者は“amateurs”と“professionals”に明確に二分され、この区別が大切なのだと指摘している。Billington, Ray A., “The Origin of the Land Speculator as a Frontier Type.” (*Agricultural History*. Vol. 19, No. 4, Oct., 1945, pp. 204-212).